九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

方言国語史と地域的隣接性の問題 : 方言区分論・方言系譜論

奥村, 三雄

https://doi.org/10.15017/2332617

出版情報：文學研究. 84, pp.1-27, 1987-02-28. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

方言国語史と地域的隣接性の問題

——方言区分論・方言系譜論——

奥村三雄

目次

〔1〕方言国語史の方法　〔2〕地域的比較における隣接地域の仮説　〔3〕境界線主義の方言区画と史的観点　〔4〕九州諸方言アクセントの系譜　〔5〕筑前式と見島式　〔6〕筑前式諸方言アクセントの系譜　〔7〕終りに——表一・表二・付図

〔1〕かねてから私の提唱する方言国語史は、文献資料による国語史—即ち文献国語史に対立する概念であり、現存の方言資料を、種々の観点から国語史研究に役立てようとするが、その具体的方法としては、一応、次の如きを考える。

（甲）地域的比較法—左記(a)と(b)に分れる。

(a) 比較方言学的方法—《体系性・法則性重視、巨視的、内的言語変化主義》等が特徴。

(b) 方言地理学的方法—《分布図重視、微視的、外的言語変化主義》等が特徴。

（乙）地域的比較の補助的原理—ⓐ言語変化の一般的方向の仮説　ⓑ動態逆算の仮説　ⓒ体系性の仮説　ⓓ類推作用の仮説　ⓔ複合保存の仮説　ⓕ語音形態の仮説等。

〔1・1〕 その地域的比較法には、いわゆる比較方言学的方法や方言地理学的方法等がすべて含まれるわけで、一見、方法論的な潔癖さを欠くようだが、しかしあれやこれやをとりこんだ為、方法論的な混乱を招くという事はないはずである。『国語学』145集122頁下段あたりの真田信治氏批評も参照の事。

もともと右記(甲)の(a)(b)については、『講座方言学(2)』(昭59国書刊行会)の金田一春彦氏・柴田武氏論文や、『国語と国文学』50巻6号金田一氏論文、柴田武氏『言語地理学の方法』(昭44筑摩書房)、『学習院大学国語国文学会誌』17号徳川宗賢氏論文等々、それぞれ方法的特徴を記した記述は多いが、その両者の協力的研究は余り見られない。ここでは、特にそれらの協力が必要であり、且つ可能である事を強調したい。

〔1・2〕 先ず従来の方言地理学では、言語変化の理論的考察が不充分な場合もある。元来、方言地理学は言語変化の一般法則を否定する所から出発したとも言えるが、法則性批判の為の例外探しに走ったりする前に、先ず巨視的立場から、その法則性を認めるという柔軟さが必要だろう。

〔1・3〕 ただしその問題の詳述は別稿をまつ事とし、ここではさし当り、比較方言学における地域的隣接性の問題を考えてみよう。従来の比較方言学は、一般に地域的遠近関係を重視しないようだが、それを考えて悪いはずがない。いわゆる方言地理学的論文では、余り意味のない分布図を義理のように付け加えたり、分布図をごく皮相的に軽率に解釈して足れりとするような例もあったが、それは分布図自体の問題でなく、その使い方に欠点があるのである。論文に一々分布図を添えるか否かは別として、少くとも地域的な隣接関係を考慮する事は、常に必要と考えられる。

例えば《北伊勢亀山方言における起キル類(三拍一段式I類)の終止形アクセントが、○●○型をとる》事に関し、無反省に隣接濃尾方言の影響を考える(『方言研究』10号井阪三男氏)が如き安易な解釈は厳に戒めねばならない。そこでは金田一氏(『国語と国文学』50巻6号)のいわゆる比較方言学的観点からして、例えば《起キタ(○●○)・起キヨ

（命令形○●○）・起キヤセン（○●○○○）の如き他活用形との関係を想定する》（『方言』1巻4号服部四郎氏）など、いろんな観点が必要だろう。

しかしそれはそれとして、分布図のよき利用はやはり有益である。右記起キル類終止形のアクセント分布を詳しく調べてみるに、京阪など近畿中心部は大抵○○●型であり、○●○型は、右記北伊勢地方や、南大和（吉野郡川上村一部など）・熊野（尾鷲市三木里町など）・東近江（坂田郡米原町醒井など）・西美濃（不破郡垂井町など）・西播摩（佐用郡佐用町など）の各一部等々、いわゆる乙種系アクセントとの境界域に著しい。もしその○●○型が、専ら起キタ・起キョ等の○●○型に影響されたものならば、京阪その他の地方でも、同様の現象が起って然るべきなのに、そこでは○○●の如き無核型が普通であり、むしろ起キテ（○○●〜下サイの意）・起キナ（○○● 起キナサイの意）・起キマス（○○○●）等の諸形との関係が想定される。北伊勢地方の起キル類終止形○●○型については結局、起キタなど他活用形の類推という内的要因、及び隣接方言の影響という外的要因の両者を想定すべきだろう。

㊟ アクセント表記において、●・○はそれぞれ高音拍・低音拍を示す。

※なお近畿地方の形容詞アクセントに関しては、『国語アクセント論叢』257頁〜生田早苗氏論文・『近畿方言の総合的研究』85頁〜拙稿等も参照の事。

いわゆる方言国語史的方法とは少し立場が異なるようだが、『学習院大学国語国文学会誌』6号徳川宗賢氏論文は、《比較方言学的なアクセント系譜論でも、地図の利用が有効である》事を夙に主張したものとして、大いに注目される。型の区別に調価を考え合わせた御研究の進展を鶴首している次第である。

〔2〕 かくして方言国語史の地域的比較法は、いわゆる方言地理学とは別個に、隣接地域の仮説——つまり《隣接地域の方言は相互によく似ているはず》という考え方——を第一原理として立てる。『解釈と鑑賞』34巻8号26頁〜等も参照

の事。

方言国語史の地域的比較法では、右記(i)隣接地域の仮説の他、(ii)遠隔地域の仮説、(iii)中間地域の仮説などを掲げるわけだが、このような構想の発表は、昭和42年秋の日本方言研究会シンポジウム（於広島大学）あたりが最初だったかと思う。尤も『解釈と鑑賞』34巻8号や『新編国語史概説』（昭53有精堂）50頁〜等の拙稿では、たまたま右記(i)よりも(ii)や(iii)に紙数を割き、いわゆるＡＢＡ型分布やＡＢＣ型分布の解釈等を試みる事となったが、これもつまりは、(i)がその第一原理として、(ii)や(iii)よりも簡単明瞭な理法だった為と言えようか。

〔2・1〕 なお右記隣接地域の仮説は、《言語は地を這うように伝播する》という方言地理学的な考え方に連るようだが、しかし方言国語史的方法が、必ずしも方言地理学的方法と一致するものでない事は、旧稿でもくり返し述べてきた如くである。

〔3〕 所で、右記地域的隣接性を重視した方言国語史的研究は、当然また《史的関係を物語り得る方言区画論》という考え方に連る。境界線主義の方言区画が隣接地どうしの方言比較を重視する事は言うまでもないが、私は《そのような境界線主義であり乍ら、而も各方言間の史的関係を物語る（具体的には、多くの分布図を重ね合わせて行く事により、境界線に軽重の差をつけ、大区分から逐次小区分に至るというような方法）》方言区画を提唱してきた。

柴田武氏（『方言研究年報』3）等によれば、私の区画論は、ドイツの言語地理学者 K. Haag（ハーグ）や Grosse（グローセ）が Kernlandschaft（方言圏）を求めた方法に通じるらしいが、また一方、馬瀬良雄氏（『信州大学人文論集』4号16頁）によれば、厳密な意味の方言圏派ではないと言う。つまりは《分布図の重ね合わせ》という私の考え方が方言圏派に似ているのに対し、《各境界の重要性の判定により、大区分から漸次小区分に区画して行く》という点で、それと異なるのだろう。『国語国文』27巻3号・『日本の方言区画』（昭39東京堂）・『シンポジウム日本語(5)』（昭50学生社）・『講座方言学(2)』（昭59国書刊行会）その他の拙稿を参照されたい。

〔3・1〕方言区画が、諸方言間の史的関係を説明し得るものであるべき事は、『日本方言学』（昭29吉川弘文館）14頁東条操氏・『方言学概説』（昭37武蔵野書院）金田一春彦氏など、従来からもしばしば説かれた所であるが、しかし、例えば史的関係の説明というねらいが、地域的隣接性を軽視した区画論に連るような事は、厳に戒めねばならない。前述の如く比較方言学は、方言間の影響関係よりも分派関係を重視する傾向にあるが、しかし今日（こんにち）現在の方言的対立において、《A方言とB方言とが或時期に分派し、それ以後、相互の影響関係が全く無かった》というような事は考え難い。また分派関係と言っても、ウラルアルタイ語系とか印欧語族というような大味な問題だけでなく、《「頭（アタマ）・鏡（カガミ）」の類の京都アクセントは、概ね近世期頃に●●○→●○○の変化をおこして阪神地方のアクセントと袂を分った》というような近代的現象も含まれるのである。

〔3・11〕かくして、古今を通じ不断にくり返されてきた諸方言間相互の分派関係・影響関係の事実を、きめ細かく考察して行く事こそが、方言の史的研究なのである。而して地域的連続性を無視したような方言区分は、巨視的観点では或程度意味をもつ事もあるが、右記子細な面に立ち入っての史的考察が難しい。尤も右記は、《影響関係の問題を考慮しない限り、分派関係の充分な考察も難しい》というわけであり、分派関係考察自体の重要性を云々するものではない事、勿論である。

〔3・2〕地域的連続性を超越した方言区分としては、先ず左記金田一春彦氏の方言区画（東京堂刊『日本の方言区画』92頁〜・東京堂刊『日本語方言の研究』77頁〜その他）が注目される。

(A)内輪方言――近畿・四国の大部分、北陸の一部分。(B)中輪方言――(A)(C)の地域以外。(C)外輪方言――北海道・奥羽・北関東・八丈島・能登西北部・大井川上流及び甲州奈良田・出雲隠岐・九州大部分。

これは比較方言学的な方言区画とでも称すべきものだろうが、《方言区画》の概念からはわかり難い所が多い。第一、その外輪式諸方言が互いによく似たものと言えない点、問題になる。一応、内輪方言との差が著しいという共通

性を持つとも言えるが、しかし内輪方言との差も、地域によりその内容が異なる。もともとこの区分は、アクセント現象を中心とするらしいが、その他の諸現象が必ずしも同様の分布を示すとは限らない事、言をまつまい。更にはアクセント面でも、その外輪方言には、金田一氏御自身も指摘される如く、いわゆる擬乙種や丙種（九州西南部）・一型などいろんな性格のものが含まれるし、また右記擬乙種の中にも、無核型のない筑前方言とか、第一拍が核を保ち難い北奥羽方言等々が含まれ、一様でない。《親子は二親等、兄弟は三親等》というような比喩的論法は、却って話を混乱させるかもしれないが、ともあれ世代の新しさだけをたてにとって、親子関係を軽視し、兄弟どうしの親近性を重視するのは如何なものであろうか。そう言えば、アクセント区分においては、一般に《具体的調値を軽視し、型（かた）の数のみから分類する》というような傾向が著しいようだが、それらいずれも、或程度同様の事が言えようか。

〔3・201〕 尤も前記金田一氏の外輪方言は、《(a)東日本方言……(f)九州方言》の如く六分され、その(f)は更に《①筑前・壱岐対馬……④薩隅・五島》の如く細分される。而してその小区分方言は、《(f)の④に薩隅と五島を含める》事など若干の問題があるにしても、地域的連続性等の面の考慮も見られ、概ね方言区画として納得すべき点が多い。それら(a)〜(f)を一括して外輪方言と称する所に、問題の核心が存するわけである。

〔3・21〕 また、右記金田一氏説以外でも、例えば出雲方言と奥羽方言との共通性を重視するような方言区画（『解釈と鑑賞』19巻6号大岩正仲氏論文その他）は、しばしば認められるが、言語体系全体として見た場合、出雲方言が隣接山陰諸方言に似ている事など、詳述を要するまい。『シンポジウム日本語(5)』261頁その他も参照の事。

〔3・22〕 これに対し、いわゆる内輪方言は、地域的連続性の面では問題がないようだが、しかしその下位区分については、やはり同様の問題が次々に出てくる。その具体例が、『解釈と鑑賞』19巻6号や『日本文化風土記(5)』（河出書房）等における楳垣実氏の近畿方言区画であろうか。そこでは《中近畿・内近畿・外近畿の如き区画が行われ、その外近畿方言には、北近畿の丹後・但馬方言と、南近畿の南大和・南紀熊野方言とが含まれる》など、右記金

田一氏の日本方言区画との酷似が注目をひく。『日本の方言区画』94頁の記述等からすれば、金田一氏の日本方言区画が楳垣氏の近畿方言区画に影響されたものと言えそうだが、何れにしても、金田一氏の内輪式方言に関する下位区画としては当然、右記楳垣氏説或いはそれに似たものが考えられる。

〔3・221〕 楳垣氏の近畿方言区画に対する疑問は、『講座方言学(2)』の拙稿その他でも或程度述べた事があるが、ともあれその外近畿方言批判は、《丹後但馬地方と、南大和南紀熊野地方との間に地域的断絶がある》という事よりも、《離れているが故に、全般的に見た場合、言語的共通性が少い》点を、問題視するわけである。

方言的特徴全体として見た場合、前者はやはり、奥丹波〜山陰地方に通じる北近畿方言的性格が著しく、後者は南近畿方言——つまり南伊勢や紀州・大和地方の言葉——に似た面が多い。《いわゆる外近畿式諸方言は、いずれも内近畿(京都・大阪地方)方言的要素が少ない》というような消極的共通性はさて措き、両方言の間にはたまたまアクセントの共通性が或程度存していて注目されるが、しかしその他の面では余り共通性がない。そこにはむしろ、左記(a)〜(c)など重要な言語差が数多認められるのである。(a)前者は「起キナル・起キンサル」の如き敬語辞がよく用いられるが、後者は敬語辞の使用が少い。(b)前者は山陰方言の一環として、「指定辞ダ、ワ行五段動詞促音便」など、東日本方言に似た要素がしばしば見られるが、後者はそれが稀。(c)後者は「バ・マ行長音便飲オダ、過去推量法書イツロオ」等の現象がしばしば見られるが、前者はそれが稀等々。

更にはアクセント面でも、二拍名詞以外は必ずしも共通性が著しくない。むしろ左記(i)(ii)の如き差があれこれ注目されるのである。(i)前者では一拍名詞日(ヒ)類(Ⅱ類)が、血(チ)類(Ⅰ類)と同様の○▼型をとるが、後者では、それが木(キ)類(Ⅲ類)と合併して●▽型をとる。(ii)前者では三拍形容詞赤イ(アカ)類(Ⅰ類)が白イ(シロ)類(Ⅱ類)と合併して、○●○型をとる場合が多いが、後者ではそれが概ね○●●型になり、白イ類の○●○型と区別される等々。

㊟ アクセントのⅠ類Ⅱ類などについては、『国語学辞典』（昭30東京堂）994頁等を参照の事。以下同様。

〔3・3〕 一方、『シンポジウム日本語(5)』250頁（徳川宗賢氏）や『岩波講座日本語(11)』79頁（加藤正信氏）等では、新しい方言区分法として、《例えばA地点を規準に、その言語的特徴をB・C……諸地点と比べ、その一致度により等点線を引く。更に今度は、B地点・C地点……を規準に、漸次同様の操作をくり返して行く》というような地域的比較法が提唱される。それが新しい方法であるかどうかは別として、前記比較方言学的な考え方に通じる面も多く、やはり分布図重ね合わせ法に勝るとは言い難いものがある。

〔3・31〕 さし当り『岩波講座日本語(11)』79頁では、『日本言語地図』や古い国語調査委員会の分布図を資料として、東日本諸方言における京都方言との一致度を六段階に分かち、等高線ふうに示した地図が掲げられるが、しかしそこに得られる区画は、その意味がわからない。右記加藤氏作図を見ても、東京と秋田は同じ第五段階。岩手と千葉は同じ第六段階所属だが、これは氏自らも指摘される如く、東京方言と秋田方言が似ている事を意味しない。各段階は、それぞれ京都方言との差を示すだけであり、その内容とは無関係なのである。仮にa・b・cの言語的特徴が〈京都・東京／秋田〉という異同関係を示し、d・e・fの特徴が〈京都・秋田／東京〉という異同関係を示すならば、東京と秋田の言語的共通性が皆無でも、同じ段階に所属し得る。

率直に言って、右記《A地点（例えば京都）を規準に異同を考える》という事自体が、方言区画の方法として不自然だろう。順次B・C……各地点を規準に同様の操作をくり返すとした場合、そのくり返しの程度にもよるが、或程度の結果を得る為には、気の遠くなりそうな労力が予想されるが、そのような労力によって得られるもの自体、分布図の重ね合わせ等に比し、空しいものに感じられるのである。

〔3・32〕 もともとこの種（比較方言学的方法も含めて）の考え方は、《等語線重ね合わせ法が境界線主義であり、遠隔地どうしの異同関係を示さない故、その欠点を補う》というような目的をもつ（『シンポジウム日本語(5)』250頁その他）

ようだが、実際問題として、この方法が分布図重ね合わせ法よりまさるかどうか、いささか考えさせられるのである。

仮に薩摩方言の或現象が北奥羽方言に似ているとしても、それは特殊な学問的作業の結果わかる事であり、概ね住民自身の言語生活や方言意識等とは無関係である。つまり薩摩人にとって問題になるのは、原則として隣接地大隅や肥後等の方言との異同関係であり、自分達の言葉がどの範囲にまで通用するかという事である。尤も当面の問題は、そのような言語生活や方言意識等とは別ものと言えるかもしれないが、しかしそれはそれとして、地域的連続性という事がもつ意味の重要性を忘れてはなるまい。

〔3・4〕 以上、史的観点という事も充分考慮しながら、《地域的隣接関係を軽視した方言区分》を批判してきたが、何れにしてもそれは、例えば《前記外輪方言所属の奥羽方言と九州（東北部以外）方言とが地域的に隔絶している》事自体よりも、《離れているが故に、全体として言語的共通性が少い》点を問題視するわけである。或言語現象に関し、南北両方言の間に共通性があったとしても、全体的に見た場合、九州（大部分）方言はやはり、九州東北部方言はじめ西日本諸方言との共通性が著しいのである。

〔3・401〕 詮ずる所、地域的連続性に矛盾するような方言区画は、言語区分としても本物でない場合が多いと言えようか。いわゆるＡＢＡ型区分――つまり地域的連続性を超越した区分は、個々の現象分布図においてこそしばしば認められるが、しかし多くの分布図を重ね合わせて行けば、そのような区分は稀になってくるはずである。更には個々の現象分布図に関しても、遠隔地どうしの同一形には、偶然の一致とか見せかけの相似の類が有り得る点、充分注意せねばならない。歴史的な時代区分等の場合も、或程度同様の事が言える。例えば《中央集権的か地方分権的か》等、或一つの観点で見ると、時を隔てて似たような事象が現われ、復古維新などと称される事もあるが、しかしいろんな面から見て行くと、やはり近い時代が相互によく似ているはずなのである。

〔3・41〕 尤も、地域的にかけ離れた二地点間に、幾つかの言語的共通性が認められる事もある。例えば『京都学

芸大学研究報告』人文(5)（昭29）の拙稿等でも指摘した如く、天橋立あたり以西の奥丹後地方は、《(i)いわゆる乙種アクセント　(ii)一拍語長音化が稀　(iii)断定辞ダ　(iv)ワ行五段動詞促音便》など、隣接の口丹後（旧宮津町や舞鶴あたり）方言と異なり、東日本方言に似た現象があれこれ見られる。

〔3・411〕もし言語体系の大部分にわたり、右記のような傾向性を示すならば、私も、《奥丹後方言と東日本方言を同一区分に含める》立場に賛意を表する。現に、方言国語史における遠隔地域の仮説でも、《言語体系の大部分にわたるようなＡＢＡ型分布は稀》というような原則をたてながら、若干の例外として、対馬の浅藻や水崎と山陽方言との体系的共通性等を指摘した。『解釈と鑑賞』34巻8号27～29頁あたりの《ＡＢＡ型分布(イ)》その他を参照の事。

しかし実際問題としてそのような例は、マスコミや言語教育等による共通語の伝播以外はごく少い。右記浅藻や水崎など、比較的新しい頃に住民が大挙して移動したような場合が例外的存在となるわけだが、その種の例外も、時間と共に漸次隣接方言に同化されて行く。従来《言語島》と称された肥前の唐津・島原や日向の延岡等も、現在では概ね隣接地域と大差ない方言が使用されている。

そう言えば前記奥丹後方言の場合も、言語体系全般としては、やはり隣接の口丹後方言によく似ており、東日本との共通性は前記(i)～(iv)など、ごく限られた現象のみに認められる。更にはその(i)も、三拍形容詞赤イ類（Ⅰ類）と白イ類（Ⅱ類）の合併など、口丹後方言に似た現象がしばしば見られる。また前記(iv)等は厳密には、(i)～(iii)等と異質であり、その分布域もかなり西に偏する。

〔3・412〕この場合、言語体系全般にわたるようなＡＢＡ型分布が稀だったとしても、例えば前記奥丹後方言と東日本方言との関係など、《いくつかの言語現象にわたって同じようなＡＢＡ型分布が見られる》という事実の指摘が有益であること、言をまつまい。而して私の主張する分布図重ね合わせ法は、旧稿でも指摘した如く、そのような事実の発見にも、極めて有効なはずである。《分布図重ね合わせ法による境界線主義区画》を批判する意見（『岩波講

座日本語(11)』76頁等）に答えるという意味もあり、敢えて一言した。

〔4〕 ともあれ方言国語史的研究では、《地域的に隣接した方言が相互によく似ており、歴史的にも親近性が想定されるはず》という考え方を一つの基本的原理とする。その具体例として、以下、九州諸方言における二拍名詞アクセントの系譜を考えようとするが、結論的には一応、下記〔7・1〕項表一の如き系譜を想定する。

㊟ 以下、本稿のアクセント記述は、すべて二拍名詞に「ガ・ヲ・ニ」等の助詞が付いた形を対象とする。

〔4・1〕 下記表一は大綱において、『九州文化史研究所紀要』23号の拙稿と軌を同じくするとも言えるが、最近、添田建治郎氏（昭和61年秋季国語学会発表要旨集55頁）――下記〔7・1〕項の表二――や中村万里氏（昭和61年秋季日本方言研究会発表要旨集11頁）など、新進学者の意見が、次々に発表されたというような事情もあり、ここに改めて、その補説を試みようとした。

〔4・11〕 さし当り右記添田氏説は、山口県見島のアクセント考察が中心だが、私のいう筑前式諸方言アクセントと見島アクセントの親近性を考えるなど、あれこれ新見もあって注目される。或いは、改めて言挙げする事なく、その説を認めるべきかと思わぬでもないが、一応、旧説の弁明という意味もあり、かたがた前記《隣接地域の仮説》の主張というような意味も兼ねて、左記(イ)(ロ)の如き問題点を指摘する。

(イ)下記表二（添田氏説）では、《筑前式諸方言と見島式との共通祖形D式が、かなり早い時点で豊前式の祖形B式と分派した》事になるが、筑前式はやはり、見島式よりも豊前式に近いと見るべきだろう。

(ロ)表二では、《福岡市の中に〈ⅠⅡⅢ／ⅣⅤ〉の体系をもつ筑前式（福岡市西部域等）と、〈ⅠⅡ／Ⅲ／ⅣⅤ〉の体系をもつ博多式（博多区・東区等）とが認められ、その前者が筑前宗像郡や、壱岐の郷浦・石田・芦辺など諸方言と一致す

るに対し、後者は筑紫郡那珂川町や粕屋郡久山町等の方言と一致する》と見るが、現在の福岡市方言に関し、両体系を峻別するのは、どんなものであろうか。福岡市東部のアクセントは、やはり壱岐諸方言よりも、福岡市西区のそれに近いと見るべきだろう。

〔5〕 先ず前記〔4・11〕項(イ)について言えば、私は下記表一の如く、《かなり早い時期において、豊前式の祖形（B式）と見島式の祖形（C式）とが袂を分かち、そのB式から、豊前式を経て筑前式諸方言ができた》と考えたい。

〔5・1〕 見島（〔7・1〕項の付図を参照の事）は、長州の萩市から北々西四十七粁の沖合に存する孤島である。その歴史地理的な問題については、例えば『見島総合学術調査報告』（昭39山口県教委）や『山口大学文学会誌』15巻1号松岡利夫氏論文・『宮本常一著作集(5)』（昭45未来社）その他を参照されたいが、何れにしても、見島と筑前地方との直接的関係を物語るような徴証は、古今を通じて殆んど認められない。

〔5・11〕 これに対し、豊前式地域と筑前式地域との境界は、ほんの紙一重である。平山輝男氏『九州方言音調の研究』（昭26）等でも指摘される如く、そのアクセント境界は、豊前（豊後も）と筑前の国界に存するのでなくて、概ね筑前側に大きく入りこんでいるが、一方、豊後の日田地方には筑前式が見られるという状態である。更には《水巻町・芦屋町・遠賀町の豊前式と、岡垣町の筑前式との対立》など、同じ郡内に両式が存するというような例も、しばしば認められる。

また大きな山や川がアクセント境界をなすわけでもない。どく巨視的には遠賀川付近を走るとも言えそうだが、しかし実際問題としては、右記遠賀郡芦屋町・遠賀町をはじめ、中間市西部・鞍手郡鞍手町・直方市一部（『九州方言音調の研究』で筑前式とされた旧植木町その他）等々、川の西側にもかなり豊前式が見られる。そのような地域的関係から見ても、《豊前式と筑前式との分派が、筑前式と見島式との分派以前に起った》というのは不自然だろう。

〔5・2〕 そう言えば言語変化の理法から言っても、下記表二より表一の方を是とすべき面が多い。特に筑前方言

のⅢ類及びⅣⅤ類が、その調価を含めて豊前式と一致する点、重視すべきだろう。これに対し、見島（見島のアクセントについては、『語文研究』61号添田氏・二階堂整氏論文等参照）におけるⅣⅤ類の○●▼型は特徴的であり、豊前式・筑前式諸方言等を含めて、他方言に余り例を見ない。もしそれがずっとA式の○●▼型を保ってきたものとすれば、誠に注目すべき特異性と言えよう。強いて言えば、それは鹿児島など西南九州方言に似ているようだが、しかし鹿児島方言等の場合は、Ⅲ類がⅣⅤ類と合併して○●〜○○▼型になる点、見島方言とは異質である。

〔5・21〕 体系的な面でも、筑前式諸方言は概ね○●▽・●○▽の二型であるが、見島（ここでは本村在）は○●▼・○●▽・●○▽の三型があり、所属語彙を離れて見れば、見島アクセントは筑前式方言よりも、むしろ豊前式方言や長州方言のそれに近いとも言える。

〔5・211〕 そう言えば『方言研究叢書(3)』岡野信子氏論文など、見島方言の、本来的なアクセントを、

	Ⅰ
○●	▽

	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
●	○▽	—	○●	▼

の如き姿と見る説があるが、これは、見島アクセントと長州（山陽式）アクセントとの系譜的親近性を、積極的に主張する事となる。尤もその説自体は疑問の節があり、むしろ

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
○●	▽	—	●	○▽	—

	○●	▽

の如き姿だったと見る添田氏説に賛成すべき面が多いが、ともあれ右記岡野氏の如き解釈もあり得るという実態は、見逃せない所だろう。アクセント面以外の言語現象を見ても、やはり見島方言は、筑前方言よりも遙かに長州方言に近いようである。

〔5・22〕 結局、筑前式と見島式との共通性は、ⅠⅡ類の調価（後続助詞の低下）という事になるわけだが、それも両方言の親近性を物語る徴証として、余り有力なものとは言えない。いわゆる西南九州方言等の場合も、ⅠⅡ類語の後続助詞は低く付く事など、考え合わすべきだろう。表一でも示した如く私は、《筑前式諸方言においてⅠⅡ類語の後続助詞が低下する》現象を、見島方言のそれと関係づけず、九州西南部方言のそれと関係づけて考えたい。

〔5・3〕 更に表二では、筑前式と見島式との親近性を主張する為、例えば左記(i)(ii)など、筑前式の成立に関して、かなり無理な想定を余儀なくされる事となった。

(i)F式〜旧筑前式にかけて、●●▽型（ⅠⅡ類）と○●▽型（Ⅲ類）とが音韻的に対立していたと考える事。

(ii)D式〜E式〜F式〜旧筑前式にかけて、Ⅲ類ⅣⅤ類はそれぞれ（D）

	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
○○▼		○●	▼

→（E）

	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
●○▽		○●	▼

→（F）

	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
○●▽		○○	▼

→（旧筑）

	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
○●▽		●○	▽

の如く、活溌に変化したが、ⅠⅡ類はずっと不安定な●●▽型を保ったと考える事等。

〔5・31〕もともと表二のA式は、『九州文化史研究所紀要』23号拙稿のA式によったものらしい故、私としても、そのA式に異論のあろうはずがない。またそのD式も表一の旧見島式（C式）と概ね一致する故、D式→見島式という推論も賛成である。

右記(i)(ii)の如き問題は、《筑前式をD式（私の言う旧見島式）の裔と見なし、豊前式から切り離した》所から生じたわけだが、ともあれ右記(i)の推定など、高起式・低起式の対立を特色とする近畿中央部方言以外では、ちょっと難しそうである。近畿中央部の京都方言においてすら、●●○型はかなり早くから安定性を欠いており、●●○型を避けようとする傾向が著しかった事など、よく考え合わすべきだろう。『国語と国文学』37巻10号金田一春彦氏論文や『論集日本語研究』（昭61明治書院）の拙稿など参照の事。

〔5・32〕『東洋語研究』3・『佐渡――自然・文学・社会――』（昭34平凡社）・『国語研究』21・22の金田一春彦氏論文等でも指摘される如く、●●▼→●●▽の変化（助詞の低下）自体は、或程度各地で認められる故、表二におけるA式→D式の変化に異論はない。私もA式→旧見島式の変化として同様の助詞低下現象を考えたわけだが、《その●●▽型がかなりの期間にわたり、○●▽型との弁別性を保った》という表二の考え方は従い難いのである。北陸や讃岐の如き遠方を考えずとも、例えば九州の肥前や肥後北部地域のⅠⅡ類アクセント、或いは壱岐西北部のⅢ類アクセント等に関し、●●▽の存在を主張する説（平山輝男氏『九州方言音調の研究』・金田一春彦氏『日本の方言』46頁等）が有力だが、それらは何れも○●▽型との弁別性をもたない。越前や加賀地方におけるⅠ類の●●▽型等も、事情はほぼ

同様だろう。

〔6〕一方、前記〔4・2〕項(ロ)の問題として、筑前式諸方言はかなり複雑だが、しかし同じ福岡市内の方言に関し、〈ⅠⅡ／Ⅲ／ⅣⅤ〉式地域と〈ⅠⅡⅢ／ⅣⅤ〉式地域とを峻別する事は困難である。福岡市の二拍名詞アクセントは、やはり全体として、

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
多	○	●	▽	●	○▽
少	○	●	▽	●	○▽

の如き姿と見るべきだろう。

〔6・1〕ⅠⅡⅢ類の●○▽型に関し、Ⅲ類語よりもⅠⅡ類語にそれが多いとか、第二拍狭母音語に多いとかいう傾向は、多かれ少なかれ、福岡市内の何処でも認められる。この場合、《ⅠⅡ類の㊥（第二拍狭母音語の略称。これに対し第二拍広母音語を㊨と略称する）に●○▽型が多い》という傾向性が、西部（西区・早良区・城南区等）よりも東部（東区・博多区等）に著しい事は確かだが、それはかなり相対的な問題である。

〔6・11〕表二で

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
広	○	●	▽	●	○▽
狭	○	●	▽	●	○▽

式とされた東区地域でも、次の如く、ⅠⅡ類㊥の○●▽型や、Ⅲ類語及びⅠⅡ類㊨の●○▽型が、かなり認められる。左記は佐田孝氏（大正4生）はじめ、東区出身の美和台校区老人（長寿会メンバー）十名についての調査結果である。

Ⅰ類㊥の○●▽型——(a)灰汁・味・甲斐・蟹・株・粥・口・国・滝・釣・晩・藤・水・道・森・籔・宵……(b)君・霧・釘・先・鈴・星・軒……

Ⅱ類㊥の○●▽型——(a)串・旅・度・次（継布も）・冬・町……(b)鯵・肘・雪……

Ⅰ類㊨の●○▽型——(a)姉・飴・鍬・駒（将棋）・胡麻……(b)瘡・釜・鮫・品・芝・城・末・底・鷹・蓼・友・布・嫁……

Ⅱ類㊨の●○▽型——(a)痣・門・褄・妻・姫・八重……(b)毬・北・牙・頃・下・故……

Ⅲ類㊥の●○▽型——(a)一・蛆・靴・恋・太刀・海苔・姪・萩・樹脂・鰐……(b)貝・神・岸・栗・撓・皆……

Ⅲ類㊨の●○▽型——(a)桑・霜・丈・孫……(b)麻・泡・雲……

㊟　右記において、(a)は殆んど例外のないもの、(b)は人により両型の認められるものを指す。

〔6・111〕　子細の点では個人差が著しいが、今、巨視的立場から、〈●○▽型語彙数を○●▽型語彙数で除した値（αの値と称する）〉を出してみると、次の如くである。比較的表二の説に近い人の場合は、《Ⅰ Ⅱ類㊥151％強、Ⅰ Ⅱ類㊨27％強、Ⅲ類㊥16％弱、Ⅲ類㊨10％強》という状態だが、中には《Ⅰ Ⅱ類㊥85％強、Ⅰ Ⅱ類㊨32％弱、Ⅲ類㊥31％弱、Ⅲ類㊨10％強》というような人もある。

〔6・112〕　Ⅲ類の●○▽型がⅠⅡ類のそれより少い事は確かだが、しかしそれもⅠⅡ類の●○▽型と異質ではないらしく、やはり第二拍狭母音語にそれがめだつ。即ちⅢ類㊥は、右記「蛆・貝……鰐」など、福岡市全域で概ね●○▽型に安定した語が多いが、Ⅲ類㊨で●○▽型に安定した語は、せいぜい右記(a)の「桑・霜・丈・孫」位である。右記(b)の「麻・泡」の●○▽型は少数型だし、「雲」については共通語の影響等も考えられようか。

また右記αの値に関するⅠⅡ類とⅢ類の差を深く追求して行くならば、さし当り《Ⅱ類㊥よりⅠ類㊥においてαの値が高い》というような事も気になってくる。

〔6・12〕　一方、下記表二の説で

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
多	○	●	▽	●	○
少	●	○	▽		

式とされた福岡市西部や糸島郡地方でも、ⅠⅡⅢ類の●○▽型に関しては、やはり東部地域と同様、ⅠⅡ類㊥に多いという傾向性が認められる。例えば西区下山門の老人（西区出身）二名についての調査では、前記αの値が《ⅠⅡ類㊥55％強（Ⅰ類㊥58％弱・Ⅱ類㊥50％）、ⅠⅡ類㊨21％弱、Ⅲ類㊥15％弱、Ⅲ類㊨8％弱》という状態である。

東部地域との共通性と言えば、西区におけるⅠⅡ類㊨やⅢ類の●○▽型所属語は、「姉・瘡・釜・鍬・駒・胡麻……（以上Ⅰ類）、痣・門・下・妻・褄・姫・八重……（Ⅱ類）、蛆・靴・恋・海苔・萩・樹脂・鰐・桑・霜・丈・孫……（Ⅲ類）」等々、その語数も具体的語彙も、ほぼ前記東部地域のそれと一致する。

〔6・13〕 ともあれ《●○▽型がⅢ類よりⅠⅡ類に多く、また第二拍狭母音語に多い》という傾向性は、福岡市方言全部――更には筑前式（壱岐・対馬や豊後の日田地方等を含む）諸方言の大部分――において、ほぼ一般的に認められる。

而してそれら筑前式諸方言は、大抵

Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅳ Ⅴ
○●▽	多	少	●○▽

式（表一の田河式）を経たものと考えられる故、その意味では福岡市西部方言よりも東部方言の方が古い姿に近いと言えそうだが、しかし現在の西部方言が現在の東部方言の如き状態を経由したとは、必ずしも言えない。福岡市各地方言の現状については、長期にわたり、くり返し行われてきた相互の影響関係を先ず考えるべきであり、純粋親子関係を云々しようとする事自体、非現実的な試みと言うべきかもしれない。

〔6・2〕 もともと右記

Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅳ Ⅴ
○●▽	多	少	●○▽

式（田河式）の場合、Ⅲ類の○●▽型が豊前式～E式～G式とうけついできた安定形である（表一を参照）のに対し、ⅠⅡ類はG式の●●▽型から変化した時、○●▽（多数形）・●○▽（二拍狭母音語を主体とした少数形）の両型に分属したものと思われる。

下記の表一では、これを一応、田河式と称したが、ⅠⅡ類の●○▽型所属語は、地域により或程度の違いがあったと考える。端的には、壱岐の旧田河村（現芦辺町）方言以上に

Ⅰ Ⅱ Ⅲ			Ⅳ Ⅴ
○●▽			●○▽

式に近いものもあり、また一方、

Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅳ Ⅴ
○●▽	広	少	●○▽

式に近いものもあったはずなのである。その後者に近いものは壱岐南部の一部にも見られるし、また福岡市東部等もかつてはその後者に近い姿だったかと考えられる。

〔6・21〕 ただこの場合、例えば、《一旦ⓐ

Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅳ Ⅴ
○●▽	多	少	●○▽

式（端的にはⓑ

Ⅰ Ⅱ Ⅲ			Ⅳ Ⅴ
○●▽			●○▽

式に近いものもある）になった地域が、漸次、ⓒ

Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅳ Ⅴ
○●▽	広	狭	●○▽

式になって行く》とか、《その逆の変化が漸次おこる》とかいう事はあり得ない。さし当りⓐ→ⓒの変化等は、《第二拍が狭母音である場合、アクセント核を保ち難くなった変化》としておこり得るようだが、しかしⓐ式の場合、ⅠⅡ類㊥の●○▽型語はⅢ類㊥のそれと合併している故、第二拍狭母音語に

○●▽→●○▽の変化がおこれば、Ⅲ類もⅠⅡ類と行動を共にするはずなのである。

尤も右記《ⓐ→ⓒ或いはその逆の変化はおこり得ない》というのは、言うまでもなく内的変化としての話である。そのⓐ式とⓒ式とが隣接している場合、それらの間に相互的影響関係がおこるという事は、大いに有り得る話である。

〔6・222〕 福岡市諸方言（筑前式諸方言も）は、多くの場合、一旦

	Ⅲ		
		Ⅰ	
	多		Ⅱ
		少	
			Ⅳ Ⅴ
○	●	▽	● ○ ▽

の如き姿になった後、程度の差こそあれ同様に、《第二拍狭母音語を中心とした○●▽→●○▽の変化》傾向がおこったものと言えよう。それ故にこそ、福岡市方言は東部・西部ともに、Ⅲ類㊥の○●▽型が（ⅠⅡ類狭のそれより少い乍らも）存しており、その語彙が福岡市の全域を通じて概ね一致するのだろう。

〔6・221〕 ただ福岡市東部は、西部に比べてⅠⅡ類㊥の●○▽型が多い故、東部方言のかつての姿は、同じ田河式（右記〔6・21〕項ⓐ式）乍ら、西部方言のそれに比し、ややⓒ式に近かったとも考えられる。

〔6・223〕 所で本稿の場合、

	Ⅲ		
		Ⅰ	
	多		Ⅱ
		少	
			Ⅳ Ⅴ
○	●	▽	● ○ ▽

を田河式と称したが、これはあくまで《式》である故、筑前諸方言がかつて田河（壱岐の芦辺町）方言に近い姿だったという推論は、決して隣接地域の仮説に矛盾しない。なお私が、壱岐南部の田河村（現芦辺町）や武生水町（現郷浦町）等でその姿を確認したのは、昭和26年夏一週間程の調査であるが、これに対し金田一春彦氏『日本の方言』38頁や下記の表二では、壱岐南部方言が

	Ⅰ Ⅱ Ⅲ		
		Ⅳ	Ⅴ
○	●	▽	● ○ ▽

の如く示される。特に表二の場合は、《壱岐南部〈ⅠⅡⅢ／ⅣⅤ〉、福岡市東部〈ⅠⅡ／Ⅲ／ⅣⅤ〉》とする故、《壱岐南部の旧田河村〈ⅠⅡ／Ⅲ／ⅣⅤ〉、福岡市東部〈ⅠⅡⅢ／ⅣⅤ〉》という本稿の考え方に大きく対立する。

〔6・231〕 勿論、壱岐南部にも芦辺町一部（旧箱崎村）など、

	Ⅰ		
		Ⅱ	Ⅲ
	多		
		少	
			Ⅳ Ⅴ
○	●	▽	● ○ ▽

と見るべき地域は存する。そういう意味も含めて、壱岐南部のアクセントは筑前諸方言のそれによく似ているわけであり、それ故にこそ、筑前式アクセントの系譜を考えようとされる添田建治郎氏や中村万里氏に対し、壱岐南部アクセントの徹底的調査を、くり返しおすすめしてきた次第である。

しかし私の調査結果に関する限り、《概ね○●▽型に落ち着くⅢ類と、●○▽の混じるⅠⅡ類との対立》は、福岡市東部よりも壱岐田河村等に著しかった。後者の場合、Ⅲ類の●○▽型は「霜」などほんの一・二語であるが、前者のそれは「綾・霜・丈・蛆・靴・海苔・樹脂……」など、かなりの数にのぼる。壱岐南部方言における〈ⅠⅡ／Ⅲ〉の区別が、筑前諸方言のそれよりはっきりしている（「はっきりしていた」と言うべきか）ことは、同じ島内に〈Ⅲ／ⅠⅡⅣⅤ〉の如きアクセント（西北部の勝本など）が認められる事実などからも、容易に察し得る。

〔6・3〕一方、表一の田河式において、《第二拍狭母音語における○●▽→●○▽の変化》が徹底的に働けば、筑前式東部（嘉穂郡一部等）・豊後の日田市や日田郡大部分・対馬南部の如き

	Ⅰ	
広	Ⅱ	
	Ⅲ	
狭	Ⅳ	
	Ⅴ	
○●▽		
●○▽		

式（表一の日田式）となる。

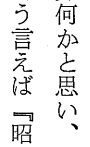
〔6・31〕なお豊後の日田地方を筑前式に含める事については、その地域的非連続性を問題にする人があるかもしれない。現に《日田地方と嘉穂郡・山田市地方の筑前式アクセントとの間に、朝倉郡・甘木市地方の一型アクセントが介在し、地域的に連続しない》事を気にするような記述（『昭和61年秋季日本方言研究会要旨集』6頁その他）は、しばしば見られるし、中には日田アクセントを、《筑前地方と別個に、それと似た様な姿となったもの》と見るような人もある。しかし日田地方のアクセントは、改めて地域的隣接性の仮説を主張するまでもなく、当然《曽って朝倉・甘木地方を介して嘉穂郡地方の筑前アクセントに続いていた》と見るべきだろう。而して、朝倉地方の小石原・秋月・夜須等々が、筑後地方の一型アクセントとの関係などもあって一型化した為、現在の如き分布状態になったと考えられる。

右記に関連して、私は或著名な方言学者から、次のような意味の私信を頂いた事がある。《九州北東部の〈ⅠⅡ／Ⅲ／Ⅳ〉式や〈ⅠⅡⅢ／ⅣⅤ〉式と、西南部の〈ⅠⅡ／ⅢⅣⅤ〉式の間には、一型アクセントの大きな川がある。その川を隔てて右記の如き類の対応が見られる点は問題だ》云々。しかしこれも、九州中央部の一型が、西南部式或いは豊前式・筑前式等から変化してできたと考えれば問題はない。つまり、もともと豊前式や筑前式と西南部式とは相

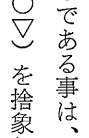
接して分布していたが、その境界地域から漸次一型化して行ったと見るわけである。

如上〔6・31〕項の記述はやや蛇足の感があるかもしれないが、いわゆる《地域的隣接性の仮説》の主張に念を入れたものと理解されれば幸いである。

〔6・32〕 一方、表一の日田式に関し、表二では

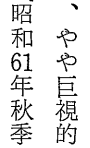


（表二の旧豆酘式）→

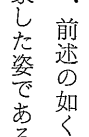


（表二の内院式）

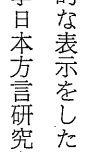
の如き成立過程を想定されるが、私は厳密な意味での



式の存在を疑う。表二の旧豆酘式は『九州文化史研究所紀要』23号拙稿の旧博多式（G）によったものらしいが、旧博多式が、厳密には

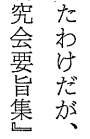


と見るべきものである事は、前述の如くである。前稿の旧博多式は言うまでもなく、

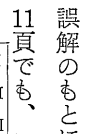


式における Ⅰ Ⅱ類の少数形（●○▽）を捨象した姿である。現存しないアクセントをG式と称して仮設したものである故、余り立ち入った表示も如何かと思い、やや巨視的な表示をしたわけだが、誤解のもとになるかもしれない。

そう言えば『昭和61年秋季日本方言研究会要旨集』11頁でも、福岡市西部・糸島郡地方等のアクセントを



（C式）の如く示し、福岡市中央区・城南区等の

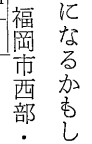


（D式）と対立させられるが、福岡市西部や糸島地方等は、そのD式と見なすべき事、前述の如くである。

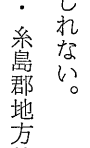
〔6・321〕 ともあれ現在の福岡市各地や壱岐南部のアクセントは、日田式よりも古い姿に近いと言えるが、しかし日田式アクセントが、かつて現在の福岡市や壱岐南部の如き姿を経由したと断言する事はできない。

〔6・322〕 表一の日田式には対馬南部の豆酘方言等も含まれるが、その豆酘アクセントも当然、日田方言の場合と同様、表一の田河式から変化したものと考えられる。

而して対馬大部分の



（峰式）は、かつては



（勝本式）の如き姿だったと見られるが、その旧峰式（勝本式）は、旧豆酘式（Ⅰ Ⅱ類㊤の多くが○●▽型になってⅢ類㊤と合併）からの変化とは見なし難い。勿論その逆も考えられない故、結局、豆酘方言と対馬大部分の方言とは、共に表一のG式からの分派として、兄弟関係に

あると想定される。壱岐大部分の方言と壱岐西北部方言との間にも、ほぼ同様の分派関係が想定されよう。壱岐大部分のアクセントが、もともと田河式或いはそれに準ずる姿であり、豆酘方言や筑前式諸方言のかつての姿と揆を一にする事など、前述の如くである。

〔6・33〕 ともあれいわゆる筑前式には、壱岐や対馬地方等も含まれるわけだが、それら諸方言の具体的な系譜については、やはり《筑前（豊後の日田地方を含む）は筑前、壱岐は壱岐、対馬は対馬というように、それぞれの内部で系譜関係を考える》べきであり、またそれが可能でもある。而してそれが隣接地域の仮説というものなのである。

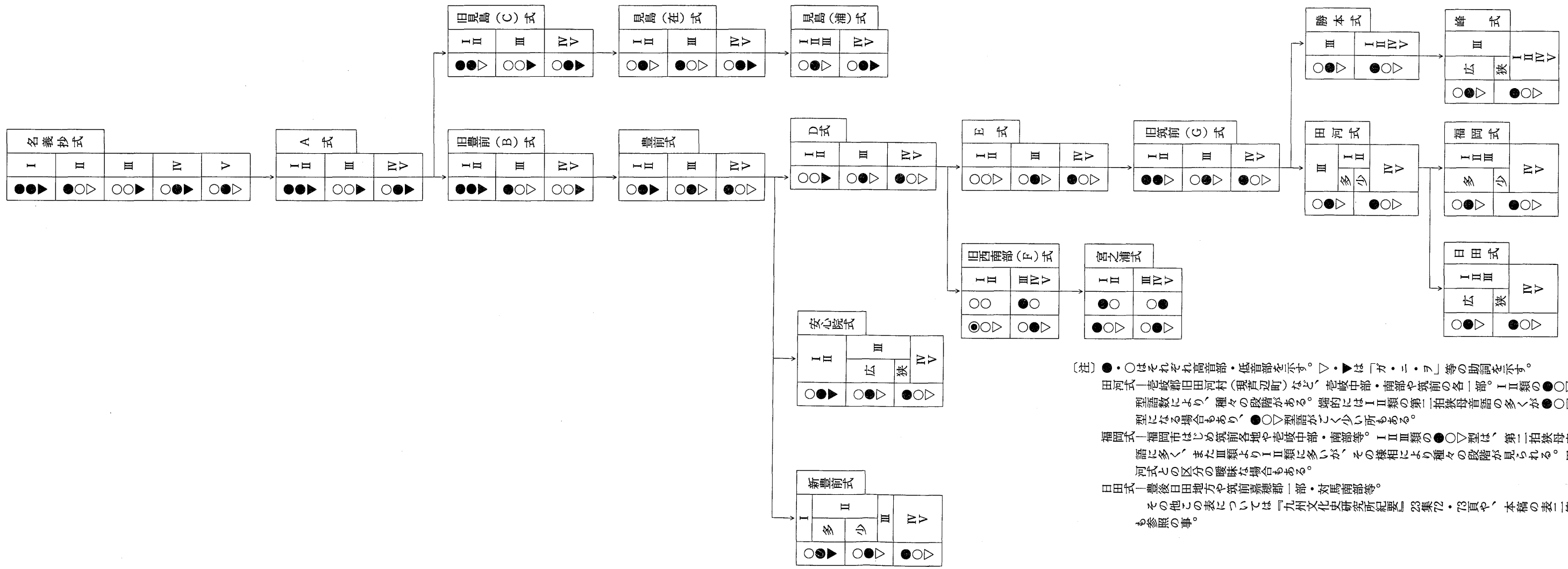
〔6・331〕 従って、表一で田河式→福岡式とあるのも、壱岐南部の田河村（現芦辺町）地方と筑前福岡地方との間の直接的交渉関係を想定したわけでなく、福岡地方が、曽つて田河式の如き姿だったと考えるのである。勝本式→峰式についても、ほぼ同様の事が言える。対馬・壱岐などをいわゆる筑前式に含めたのは、詮ずる所、それら諸方言がすべて表一のG式（旧筑前式）からの分派と見られる事に基づく。

なおこのような諸方言の分派・変化の時期は難問題であるが、ともあれ相当古い時代の事かと思われる。例えば日田と豊後諸方言との分派は、少くとも大友氏が日田地方を制圧した頃よりも、かなり溯るはずなのである。交通史研究その他の将来にまつ所が多い。

〔7〕 以上、方言国語史的方法の一つとして隣接地域の仮説を提唱し、そこから方言区分や方言系譜の問題を考えたが、特にその後者の具体例としては、九州諸方言アクセントの系譜論を試みた。それぞれの面に関し、なお記すべき問題は多く残されるが、それらについては、すべて別稿をまちたい。

〔7・1〕 最後に本稿の考え方を具体的に示す為、筑前式諸方言を中心としたアクセント系譜表二つ、及びアクセント分布図を掲げておこう。

〔表一〕九州諸方言アクセントの系譜



〔注〕●・○はそれぞれ高音部・低音部を示す。▷・▶は「ガ・ニ・ヲ」等の助詞を示す。

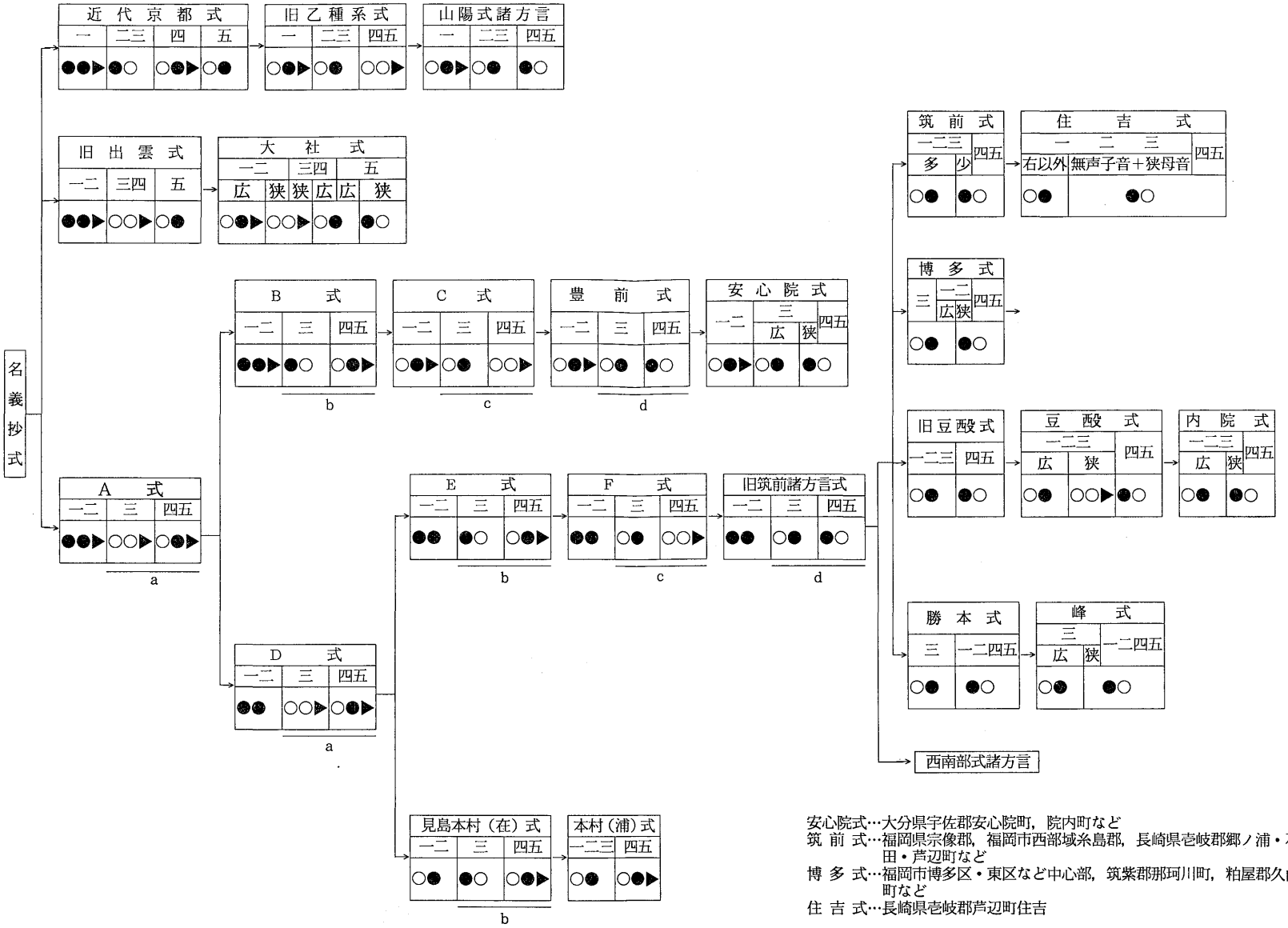
田河式―壱岐郡旧田河村（現芦辺町）など、壱岐中部・南部や筑前の各一部。I II類の●○▷型語数により、種々の段階がある。端的にはI II類の第二拍狭母音語の多くが●○▷型になる場合もあり、●○▷▷型語がごく少い所もある。

福岡式―福岡市はじめ筑前各地や壱岐中部・南部等。I II III類の●○▷型は、第二拍狭母音語に多く、またIII類よりI II類に多いが、その様相により種々の段階が見られる。田河式との区分の曖昧な場合もある。

日田式―豊後日田地方や筑前嘉穂郡一部・対馬南部等。

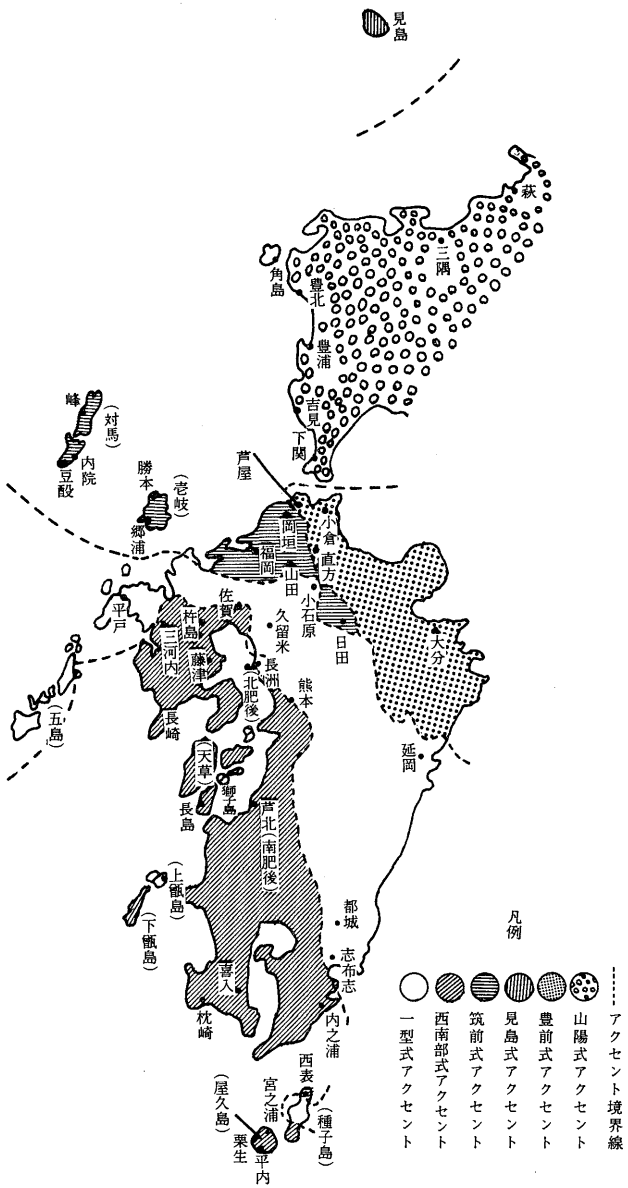
その他この表については『九州文化史研究所紀要』23集72・73頁や、本稿の表二等も参照の事。

〔表二〕『昭和61年秋季国語学会要旨集』55頁所掲のアクセント系譜（添田氏説）



安心院式…大分県宇佐郡安心院町，院内町など
筑前式…福岡県宗像郡，福岡市西部域糸島郡，長崎県壱岐郡郷ノ浦・石田・芦辺町など
博多式…福岡市博多区・東区など中心部，筑紫郡那珂川町，粕屋郡久山町など
住吉式…長崎県壱岐郡芦辺町住吉

アクセント分布図


見島
萩
三隅
角島
豊北
豊浦
吉見
下関
芦屋
峰
(対馬)
内院
豆酘
勝本
(壱岐)
郷浦
岡垣
福岡
山田
小倉
直方
小石原
日田
大分
平戸
佐賀
杵島
藤津
三河内
久留米
長洲
北肥後
熊本
(五島)
長崎
(天草)
鄕子島
長島
延岡
芦北
南肥後
(上甑島)
(下甑島)
都城
志布志
内之浦
喜入
枕崎
西表
(種子島)
宮之浦
(屋久島)
栗生
平内
凡例
アクセント境界線
山陽式アクセント
豊前式アクセント
見島式アクセント
筑前式アクセント
西南部式アクセント
一型式アクセント